

名古屋城天守石垣の基本構造について

— 詳細調査の観察から予察へ —

木村 有作

はじめに

名古屋城の大天守台については、本丸側（南東側）と、内堀側で約8 mの比高差がある。この明確な段差を含め、大天守台の基本構造については、従来言及される機会はほとんどなかった。その中で麓は、建築学的視点から宝暦期の天守改修に関わる一連の研究の中で、大天守台北面東端付近で見られる水平方向の石垣の目地について、慶長期すなわち築城期の作業段階を示すものとして独自の見解を示している（註1）。

天守台石垣調査

平成29・30年度に行った、天守台周辺石垣の基本調査及び詳細調査においては、さまざまな目的意識に基づき表面観察を行った。なかでも、石垣各位で観察される「目地」については、石垣修理の痕跡として重要な要素と位置づけられた。前述した、大天守台北面石垣（U 61 石垣）の東端付近の中段やや下付近で見られる水平方向の目地（写真1・図1）についても、宝暦期の修復に伴う積み替えの境界を示すものかどうかを含めて検討の対象となった。



写真1 大天守台北面（U 61）石垣

大天守台の石垣目地について

大天守台石垣においては、主として斜め方向に走る目地と、水平方向に走る目地が観察できる（註2）。前者は、目地を境に積み方が大きく異なるため、修理による積み直しの痕跡と推定できる。大天守台石垣については、江戸時代中頃の「宝暦大修理」（宝暦2～5：1752～55）で行われた天守建物の修理に伴う石垣の積み直しと、第二次世界大戦後の昭和30～33年（1955～1958）頃の復興天守の建築の際の積み直しの痕跡が該当する。



写真2 大天守台東面（U 62）石垣北部



写真3 大天守台南面（U 59）石垣西部

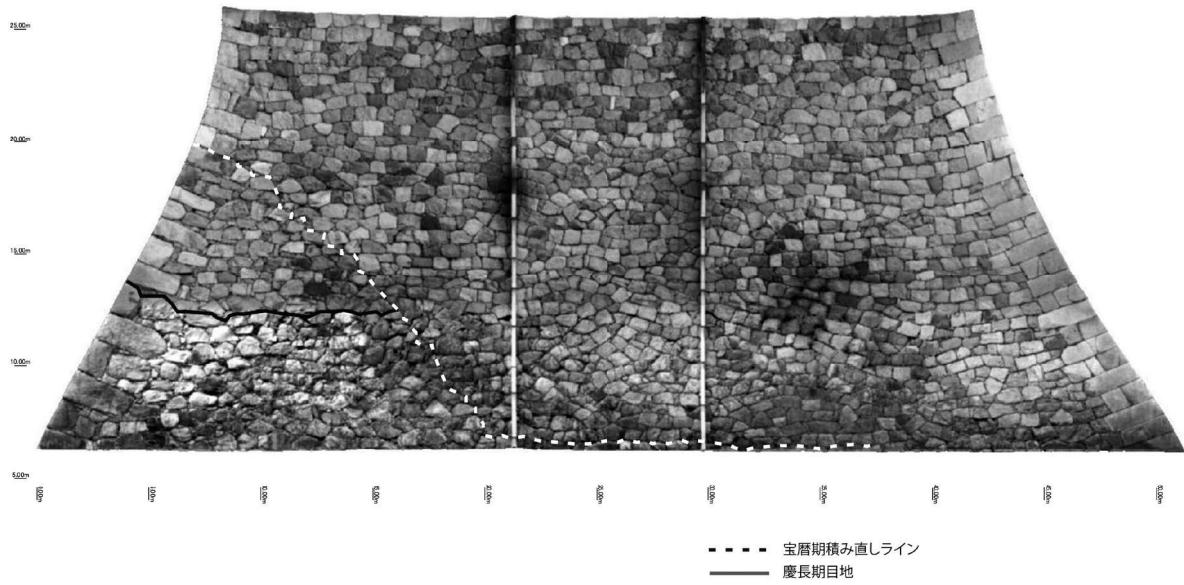


図1 大天守台北面 (U61) の立面図

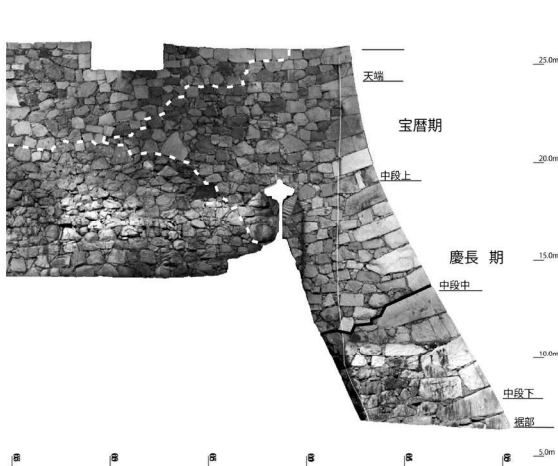


図2 大天守台東面 (U62) の水平方向目地

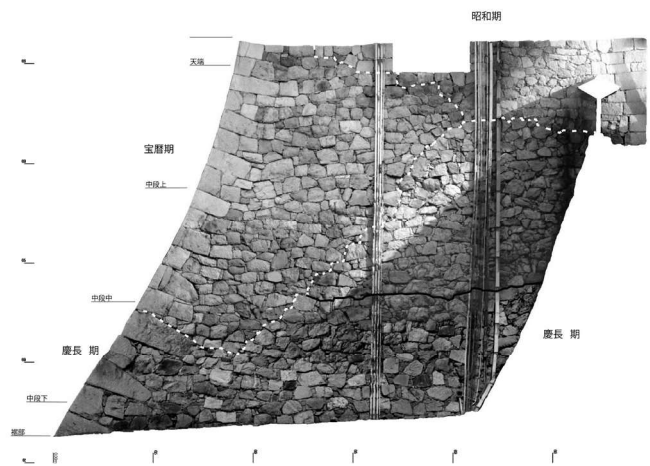


図3 大天守台南面 (U59) の水平方向目地

一方、水平方向の目地については、目地を境にした積み方に顕著な差異はなく、修理による積み方とは異なるものと考えに至った。水平方向の目地が走る部分は、築城時つまり慶長期に築かれた石垣であり、結果的に慶長期石垣は、見た目では上下2段に分けることが可能に思われる。

大天守台の北面 (U 61) 石垣で観察される水平方向の目地は、東面北部 (U 62)・南面西半 (U59) 石垣でも同じように観察することができる (写真

2・3、図2・3)。水平方向の目地の走る高さは、北面で 13.0 m T.P. (東京湾平均海面高、以下同じ)、東面で 12.5 m T.P.、南面で 13.0 m T.P. の位置である。つまり、ほぼ同じ高さであることが判る。

また、大天守台西面 (U 60) 石垣でも、南西隅角部は下段に相当する石垣が残されているものと思われる。

大天守台周辺石垣と「入角」について

大天守台に接続する石垣でも、ほぼ同じ高さで、水平方向の目地が観察できる。北東側のU 63（不明門北面西半・写真4）石垣及び南側のU 58（橋台西面・写真5）石垣である。どちらの石垣においても、目地を境に積み方が大きく変わることはなく、大天守台石垣で見た状況と類似する。U 63石垣は大天守台東面（U 62）石垣と接して「入角」を形成する。同様にU 58石垣も大天守台南面（U 59）石垣との間に入角を形成する。この、二つの入角の石の積み方を観察するといくつかの共通点を上げることができる。

内堀の北東奥（U62・U63石垣境界の入角）と、南西奥（U59・U58石垣境界の入角）の石垣積み方を観察すると、13m T.P. 付近までは基本的に一段毎交互に積んでいることが判る（写真6・8）。そして、交互に積みあげられた入隅部分の上端部は、それぞれの石垣面の水平方向の目地に合致する。

それでは、水平方向の目地より上がどう組み立てられているかを見ると、大天守台の石垣（U59・U62石垣）は、入角部より奥にそのまま続いているように見える。一方、不明門北面（U 63）石垣や橋台西面（U 58）石垣は、大天守台側の石垣（U



写真4 不明門北面西半 (U 63) 石垣

62・U 59) 面に石垣の端が当たっているのが判る。つまり、大天守台側石垣が先行して築かれていると考えられるのである。

水平方向の目地が意味するもの

以上の観察を踏まえ、大天守台石垣で確認できる水平方向の目地について、現時点で考えられることを整理してみると、以下のようになる。

- ① 大天守台で観察される目地のうち、水平方向の目地は、築城時つまり慶長期の石垣の中に含まれ、後世の修理に伴うものとは考えにくいこと。
- ② 大天守台に隣接する石垣においても、水平方向の目地が存在し、やはり修理に伴うものとは考えにくいこと。
- ③ 北面・東面・南面にのこる水平方向の目地の高さが、およそ13m T.P. 付近で共通すること。
- ④ 大天守台と隣接する石垣が作る「入角」において、水平方向の目地の上下で、積み方が異なること。

以上の4点から、大天守台石垣はその始築時において、上下2段階に分けて構築していることが明らかである。2段階にする理由を考えるには、大天守台石垣の基盤の高さが問題になると思われる。その際、前述した③の項目、各面の水平方向の目地がヒントになると考える。



写真5 橋台西面 (U 58) 石垣

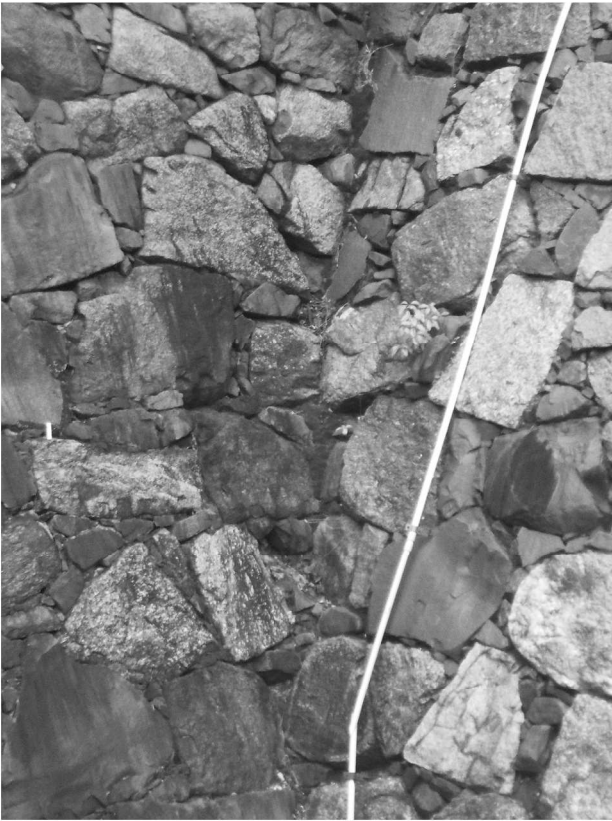


写真6 大天守台北東入隅 (U 62- U 63 間) 上半



写真8 大天守台南東入隅 (U 59- U 58 間) 上半

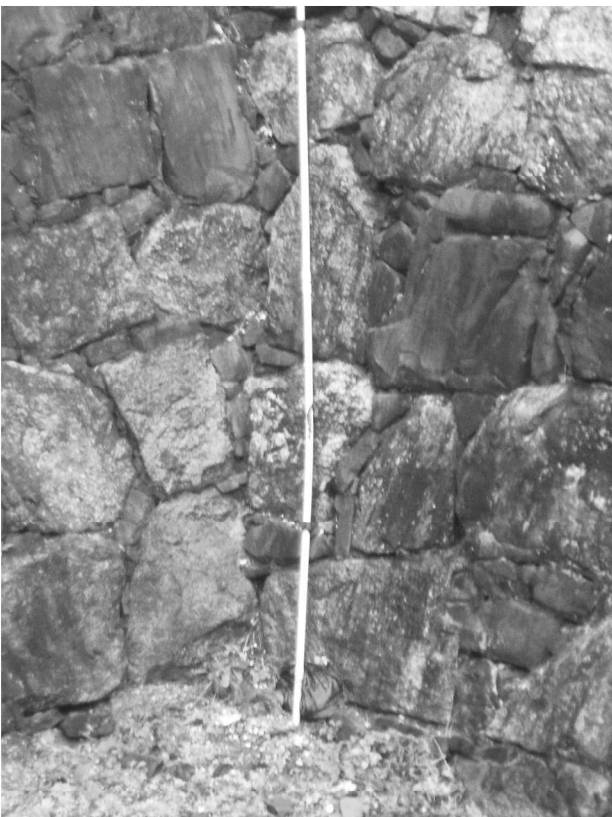


写真7 大天守台北西入隅 (U 62- U 63 間) 下半



写真9 大天守台南西入隅 (U 59- U 58 間) 下半

天守台構築の前提としての「縄張」と堀の「普請」

名古屋城の本丸天守台は、本丸の戌亥角（西北角）に構築されており、現況で天端高さが約26 m T.P.である。西面と北面は内堀から立ち上がり、現況堀底からの高さは20.5 mを測る。東面と南面はそれぞれ一端は内堀内で出角をつくり、もう一端は本丸内で出角を形成する。東面・南面の本丸現地表面からの高さは、約12 mを測る。

名古屋城本丸は、城中核部でも西寄りに位置し、地形から見ると、近世名古屋城の中核部が立地する台地（熱田台地または名古屋台地とよばれる洪積世台地）の、北西端近くに位置する。ただし、本丸は、直接台地崖に面しているわけではなく、内堀の掘削は台地縁の上面から掘り込まれた大規模な工事であったことが推測される。また、内堀を含む天守台周辺の「縄張」については、伝えられた石垣丁場の図面や指図等から、数回にわたる計画変更があったことが、先学により指摘されている（註3）。

本丸側の整地状況について

名古屋城の本丸は、外縁で一辺が百間（約200 m弱）の方形区画であり、内部の面積も2.9haと広い。四隅には天守を含む「隅櫓」が築かれ、「多門櫓」や「剣塀」などで囲まれた中に、御殿などの生活空間が確保されていたことが、指図等の絵図から伺い知ることができる。

本丸内部での整地状況については、平成21年から平成23年にかけて行われた本丸御殿関連調査（5～8次）の成果で一端を知ることができる（註4）。

そのうち、8次調査では「上り場書院（湯殿書院）」の北側小天守台近くのハンドホール設置掘削工事で、築城時以前に堆積した遺物包含層を検出し、およそ13～13.3 m T.P.のところで整地されていることが判った。

また、8次調査3区1トレンチでは、上台所北側で、築城時盛土面で13.8 m T.P.、築城以前の包含層の上面で13.5 m T.P.、地山（熱田層）面約

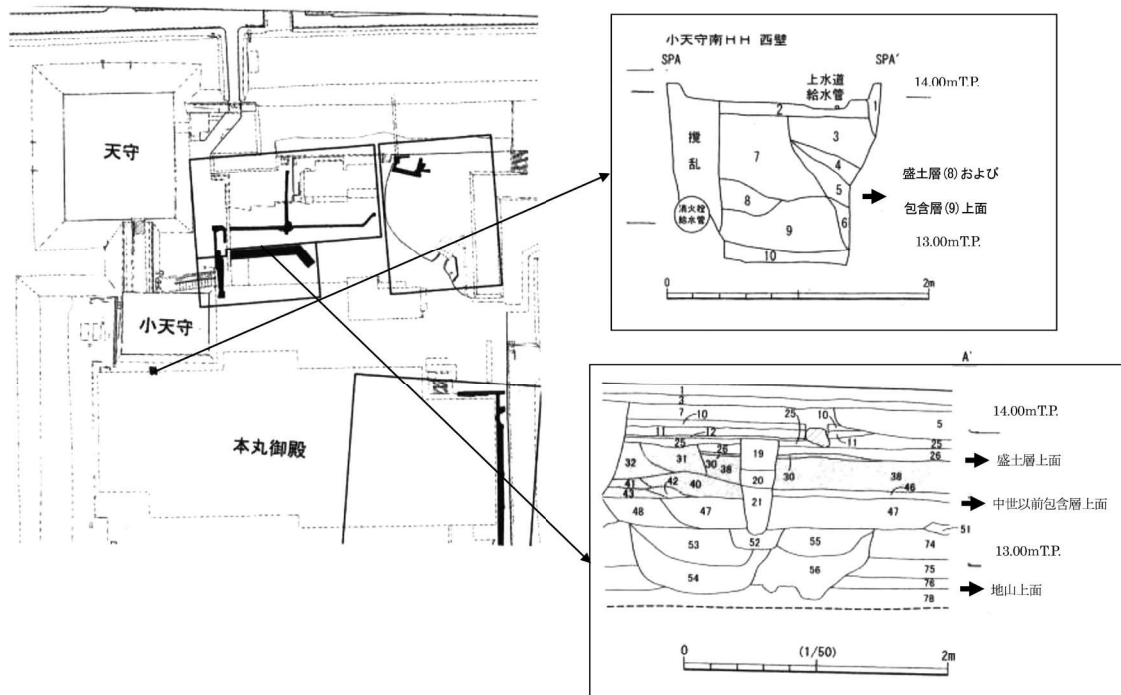


図4 本丸状況中央付近の調査

12.8 m T.P. という数値が得られた。

本丸御殿関連の発掘調査の成果等からわかることは、本丸の地表面はまず高さ 13 m T.P. 付近で整地され、その上に厚さ 30～50cm ほどの盛土が行われ、本丸生活面の高さが決定されたと思われることである。

大天守台石垣の基礎構造についての一仮説

今回の問題提起の発端は、大天守台北面 (U 61) 石垣東端で観察される、水平方向の目地であった。そして、北東や南東部における入角の組み方の観察から、築城時における上下 2 段階の石垣構築工程を想定するに至った。水平方向の目地の位置つまり 2 段階の境界線は 13 m T.P. 前後にある。この高さは、現在の本丸地表面 (約 13.2 m T.P.) よりもやや低く、おそらく築城時整地面に近いと推測される。

大天守台石垣における基盤面の高さは、本丸部分と内堀部分では、おそらく高低差をつけて計画され、8～9 m の比高差があると思われる。

大天守台石垣は、まず内堀部分の基盤面から、東接する U 63 石垣とともに下段部分を築き、その後本丸部分の基盤面からの立ち上げを含めて、上部石垣を構築したものと考える。

したがって、大天守台石垣の背面土については、下段石垣の背後はほぼ地山の熱田層、上段石垣の背面土は盛土からなると推定される。

今回提示した仮説を補足するためには、本丸部分及び内堀部分での、石垣基盤面の高さについて精度の高い数値を求めていく必要がある。

また、本稿でもっとも大きな課題として、隣接する二つの石垣、U 62 と U 58 石垣の大天守台とは反対の端の状況がある。とくに U 58 石垣に

については、西側に続く U 57 石垣との入角において、上端から下端まで U 58 石垣が先行して築かれており、U 57 石垣では水平方向の目地は観察できていない。

U 58 石垣は小天守台西面をつくる石垣でもあり、この部分については、更なる調査機会を待たざるを得ないを考える。

本稿は、大天守台石垣を表面的に観察し結果、得られた疑問について提示したものである。天守台周辺では、平成 29 年から令和 2 年にかけて、石垣周辺の発掘調査や「石垣カルテ」を含む詳細調査を実施しており、成果が報告される予定である。成果の中には、本稿の仮説を補うものもあるいは否定する方向の結果も含まれる可能性がある。いずれにしても、名古屋城の石垣調査として今できることの一つとして本稿を起し、できれば今後の名古屋城調査の検討材料の一つとなることを期したい。

註

(註 1) 名古屋城の「宝暦大修理」に関する麓氏の研究には、「名古屋城大天守宝暦大修理における本体上げ起し修理について」『日本建築学会計画系論文集 651』、「名古屋城大天守宝暦大修理における各部修理について」『日本建築学会計画系論文集 653』(共に加藤由香と共著、2010) がある。

(註 2) 「目地」・「入角」などの用語については、北垣聡一郎 1987 『石垣普請 ものと人間の文化史 58』、文化庁文化財部記念物課監修 2015 『石垣整備のてびき』等を参考にした。

(註 3) 内藤昌也 1985 『名城集成 名古屋城』、千旦嘉博 2018 『石垣の名城』など

(註 4) 名古屋市 2012 『特別史跡名古屋城跡 本丸御殿跡 発掘調査報告書—第 5・6・7・8 次調査—』